

## 日本におけるモンゴル民族の伝統祭ナーダム（ナイル）について — 在日内モンゴル人のナーダム会を事例として —

包 金山

### はじめに

現在の日本の社会において外国人の数が増加し、外国人犯罪や不法就労などが社会問題となっている一方、在日中国籍モンゴル人（主に内モンゴル自治区出身者）の数も大分増え、特に日本に留学しているモンゴル人は五千人に上るという統計もある。

清朝の「新政」の影響ではじまったモンゴル族の日本留学史は百年に渡っている。五千人と聞けばそれほど大きな数字とは聞こえないかもしれないが、中国籍モンゴル人が四百万人もいる（2000年の統計によれば内モンゴル自治区にいるモンゴル民族は4,029,150人）という現実を見れば意味重大である。そのような中で、在日内モンゴル人たちは社会組織などを次第に設立し、故郷の発展のため、あるいは伝統文化を守って発展させるという志を持って各分野で活躍している。代表的な組織に「モンゴル民族文化基金会」という組織があり、会費とコンサート興行の収入を内モンゴルにいるモンゴル族学生への奨学金として使っている。そのほか、1992年に設立された「モンゴルブフクラブ」（ブフというのはモンゴル語で相撲の意）という組織がある。このクラブで毎年ナーダムが行なわれ、モンゴル民族の伝統スポーツであるモンゴル相撲が行われている。

在日内モンゴル人についての研究と調査も

始まっている。例えば、在日内モンゴル出身のモンゴル族留学生の経済状況や、在日内モンゴル出身のモンゴル族留学生のアイデンティティについて、その他には日本に留学した内モンゴル出身のモンゴル族留学生による文学作品の研究などがある。しかし、日本におけるモンゴル民族の伝統的な祭りであるナーダムに関する調査や研究は、日本でも内モンゴルでもまだ行われてない。このような前提から、日本におけるモンゴル民族の伝統的な祭り—ナーダム（ナイル）について調査し、異文化において行われてきたナーダムの歴史と、参加している人々の心の問題を明らかにすることを目的としている。今回は主にナーダムについて論じる。

### 歴史の中のナーダム

ナーダムと言えば、人々の遊びの具体的な形を示す場合と日常で人々の行う冗談・いたずらなどを指す場合がある。モンゴル民族も、その長い歴史の中で遊牧生活に適応した遊びの形を形成し、日々の余暇において、あるいは祝祭においてこれを実現してきた。このなかで最も代表的なナーダムと言えば相撲、競馬、歩射という内容を含むいわゆる「男の三つのナーダム」と呼ばれるものである。包金山の「男の三つのナーダムと解放後のナイル、ナーダムの発展」という論文によれば「男の

三つのナーダム」の中から少なくとも二種類以上およびほかの三、四種類のスポーツの項目を含めたものをナーダムとし、それ以外に相撲だけを行う時にはナイルとしている。『史記・匈奴伝』によれば、匈奴の各部族の領袖たちは毎年正月にの単于の元が、春祭りの時に集まる。また五月には龍という都市に集まり先祖、天地、各天の神様を祭祀した後、相撲、競馬、歩射の競争が行われていて、この三つの中から一つだけを行うこともあった。それ以外に歌と舞も含まれていた。相撲、競馬という内容を含めたナーダム（あるいはナイル）を発展させ、完成させたのはモンゴル帝国、元、清朝の時代である。元代には「校署」と呼ばれる相撲のことを管理する機関まで設立されていた。

#### ナーダムとモンゴル人のオボー信仰

モンゴル人は仏教を信じる前にシャーマニズムを信じていたため、ナーダムを行なう時シャーマン（モンゴル語で「ボ」）が儀礼や行事をおこなっていた。

例えば、内モンゴルのどんな地域でも見ることのできるオボーには、この地域を支配している神がいるという信仰がある。オボー祭りといえばモンゴル民族の原始的かつ素朴な信仰形態である。これはモンゴル族の年ごとの重要な宗教活動であり、内モンゴルにおける今日のナーダム会はオボー祭りに由来するという結論を出している研究者もいる。オボー祭りがいつから始まったかという正確な研究結果は未だに出てない。オボーの歴史については盖山林の『モンゴル族の文物と考古研究』によると元の時代に存在していた。また、ボラガの『宗教』によると、騎馬民族の匈奴は年に2回オボー祭りを行っていた。筆

者は、モンゴル地域での最初のオボーは人の力で立てられたものではなく、自然の丘のことを指し、それがモンゴル人の自然信仰と繋がっていると論じている。この論点によれば、オボー祭りは匈奴の時代にも存在していたことになる。オボーは俗に小高い所や結界とおぼしき所、何らかの理由で神聖とされる所などに祀られている。石を三角錐に積み上げたものが多いが、中央に棒をたてて周囲に木の枝を添わせて三角錐形にしたものもある。石のない地域では柳の枝を編んで作ったリュウの中に土を詰め、形が丸く、上部が尖っているように作り、小さな丘の上に積んでおく。地域によってオボーの種類と数は異なる。『モンゴル民俗大事典』によるとオボーは21種類に分けられている。オボーの数は基本的には一つであるけれど、数が多く、集団的なオボーも存在している。『モンゴル民俗大事典』には、オボーの数は基本的に2、3、4、5、7、9、13、27、33、であると記録されている。オボーには、祀ることを目的としたオボーと、そうでないオボーの二種類がある。祀るオボーにはシャーマニズムとラマ教の影響が強く、それも地域によって異なる。例えばフロンボイルとジリムには、シャーマニズムの影響が今でも残っている。また、祀る日が決まったオボーと決まっていないオボーもある。清朝時代のオボー祭りは主に夏に行われており、祀る日は5月15日だった。祀ることを目的としないオボーとは主に境界の区別のために建てられたものであり、『大清会典事例・理藩院・疆理』の記録によれば、遊牧する際に境界を区別するため、記号のかわりに石を使って建てられたものがある。このほかには祭りのためのオボーもある。このときのナーダムはこのオボーにおおす神を祀るための行事である。日本ではそのような祭りを天気祭

りと称している。私が中学生の時、そのようなナーダムに参加した経験がある。そのときの記録によれば、オボーを祀る前にその村の年寄り 7 人がオボーの周りを回って儀礼を行ない、その後ナーダムが始まった。ナーダムの内容は主に相撲と競馬である。『モンゴル民俗大事典』によれば、相撲と競馬の内容を含めたナイルは、神様を喜ばせる行事である。

### 現代内モンゴル地域において様々な形で行われているナーダム会（ナイル）

まず、内モンゴルの行政区分について説明する。

中国内モンゴル自治区の行政区分は内モンゴル自治区人民政府・各盟、市の人民政府・各県、旗の人民政府・各ソム、郷の人民政府・各ガチャ、村といった形を成している。ナーダムには、当地の行政機関が行う場合と個人が行なう場合の二つの形がある。内モンゴル自治区で最も大きなナーダムは、内モンゴル自治区人民政府から組織されて行なわれている「内モンゴル自治区ナーダム大会」である。これは、内モンゴル自治区にとって重大な意味のある年に行われていた。例えば、内モンゴル自治区創設記念行事ではこのようなナーダムが行なわれる。これは、いわば内モンゴル自治区のオリンピックであり、スポーツの様々な競技を含んでいる。そのほか毎年定例に行われているナーダムもある。例えば、通遼市・ジルヘ牧場では毎年 8 月 18 日にナーダムを行なっている。それは通遼市人民政府により定められた定例祝祭になっている。もちろん当地の行政機関はナーダムに繋がる経済効果を重視している。このナーダムの特徴は当地の行政機関が主導しており、日本の市民祭りと同じ性質をもっている。すなわち

神々への儀式とは関係のない、娯楽要素の強いイベント的な祭りであり、当地の活性化と商業目的が結びついたものである。

個人で行うナーダムは、主にソム、ガチャの牧民達が資金を出しあう小規模なナーダム（この時はナーダム会ではなくナイルという例が多い）であり、内容は主に相撲と競馬である。このようなナーダムは、このナーダムを支えている人たちの名を冠したオボーを祭る時（オボーを祭るというのは、モンゴル人の伝統的信仰に由来する）、また、この家に 61 歳や 73 歳の年の人間がいる時に行なわれてもいた。最近では、子供が大学に進学するときなどにも行なわれている。個人がナーダム行なう時の日取りは、個人で決めることはない。廟に参り、そこの僧（ラマ）にナーダムを行なう日についてお伺いを立てて決められる。

もう一つのナーダムの行なわれる形式は、ガチャとソムが経営している小学校の『6 月 1 日世界児童の日』を祝うために行なわれる運動会のなかに大人たちの相撲と競馬が含まれていて、小規模なナーダムになっている。その時の運動会は学校行事を超えて、ガチャ、ソモ全体の祭りになり、子供と大人を区別して行なわれる。また、このガチャ（村）全体が雨乞いをする時もナーダムが行なわれる。この時のナーダムはモンゴル人の伝統信仰と繋がり、神のあるナーダムになる。このナーダムも神のための行事であった。モンゴル人は元々、大自然の全てのものに目に見えない神々の力が存在していると信じていた。

### 日本におけるモンゴル民族の伝統祭ナーダム

日本でモンゴル民族の伝統祭ナーダムが行われるということは、日本において内モンゴ

ル人留学生の数が大幅に増えていることと直接的な関係がある。このナーダムは内モンゴル出身の人物によって設立されたブフクラブが組織し、行っている。参加者は主に内モンゴル出身の留学生であり、日本人も参加している。去年は日本人以外の外国人も参加していた。行われる日は決まっていないが、ある土、日を選んで行われる。場所も決まっていないが、公園で行われることが多い。公園は場所も広く、緑も多く、草原の感じがして、留学生達は故郷のことを思い出しながら気持ちもよくなり、ナーダムはさらに賑やかになってくる。ナーダムは午前11時頃に始まり、午後6時頃に終わる。内容は主に内モンゴル相撲である。相撲を行なうときは、司会者から内モンゴル形式の相撲のルールと特徴について、日本語で説明がされる。内モンゴル形式の相撲の基本的なルールと特徴は3回で勝敗を決めるという点にあり、3回目に優勝が決まる。第3位まで賞品が与えられ、賞品は在日内モンゴル人経営者達とナーダムの組織者が提供している。在日内モンゴル人のナーダムは、在日内モンゴル人留学生だけではなく内モンゴル本土にいるモンゴル人にも強い影響を与えている。今年のナーダムの時、内モンゴルテレビ局の責任者が現場に来て収録し、その映像を「日本における留学生たちのナーダム」というテーマで放送してとても高い評価を得た。また内モンゴルでは横綱レベルの2人も日本に来て参加し、ナーダムもより賑やかになった。

## 参考文献

- 阿南 透 2007「運動会の中の民俗—釧路市民大運動会の事例から—」『日本民俗学』日本民俗学会 第249期、pp.1-37。
- アラタンボラグ 2006「モンゴル人のボー祭りについて」『内モンゴル大学学術報』第2号、pp.43-54。
- 内モンゴル大学 2005『内モンゴル大学学術報』フフホト市、内モンゴル大学出版。
- 斉藤 三千子 「モンゴルの食儀礼」日本民俗学会第53回年次大会研究発表要旨。
- 朱 誠如 (主編) 2003『清朝通史』光緒宣統朝分券 余同元 (編) 紫禁城出版社。
- トクタホ 2006「少数民族留学生の民族的アイデンティティの変更と教育に関する考察—中国国籍モンゴル人留学生の調査を中心として—」第13回モンゴル学術交流会研究報告レジュメ、pp.1-4。
- バイガル 2006「20世紀モンゴル人の日本留学」第13回モンゴル学術交流会報告レジュメ、pp.1-4。
- ブレンテグス (主編) 1999『モンゴル民俗大事典』内モンゴル科学技術出版社。
- 包 金山 1981「男の三つのナーダムと解放後のナーダムの発展」『内モンゴル民族師範学院学報』第2号、pp.114-122。
- ボラガ 2003『宗教(上)』内モンゴル教育出版社。
- 森田 三朗 1980「長崎くんち考」『季刊人類学』11-1号、京都大学人類学研究会。
- 横田 素子 2006「1906年モンゴル民族学生の日本留学」第13回モンゴル学術交流会報告レジュメ、pp.1-4。